

剪花翁傳前編

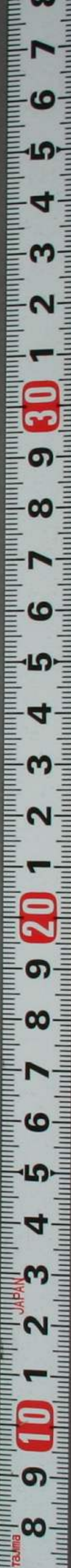
春

二正月  
月



共五

79  
3875  
1



門 29  
號 3875  
卷 1

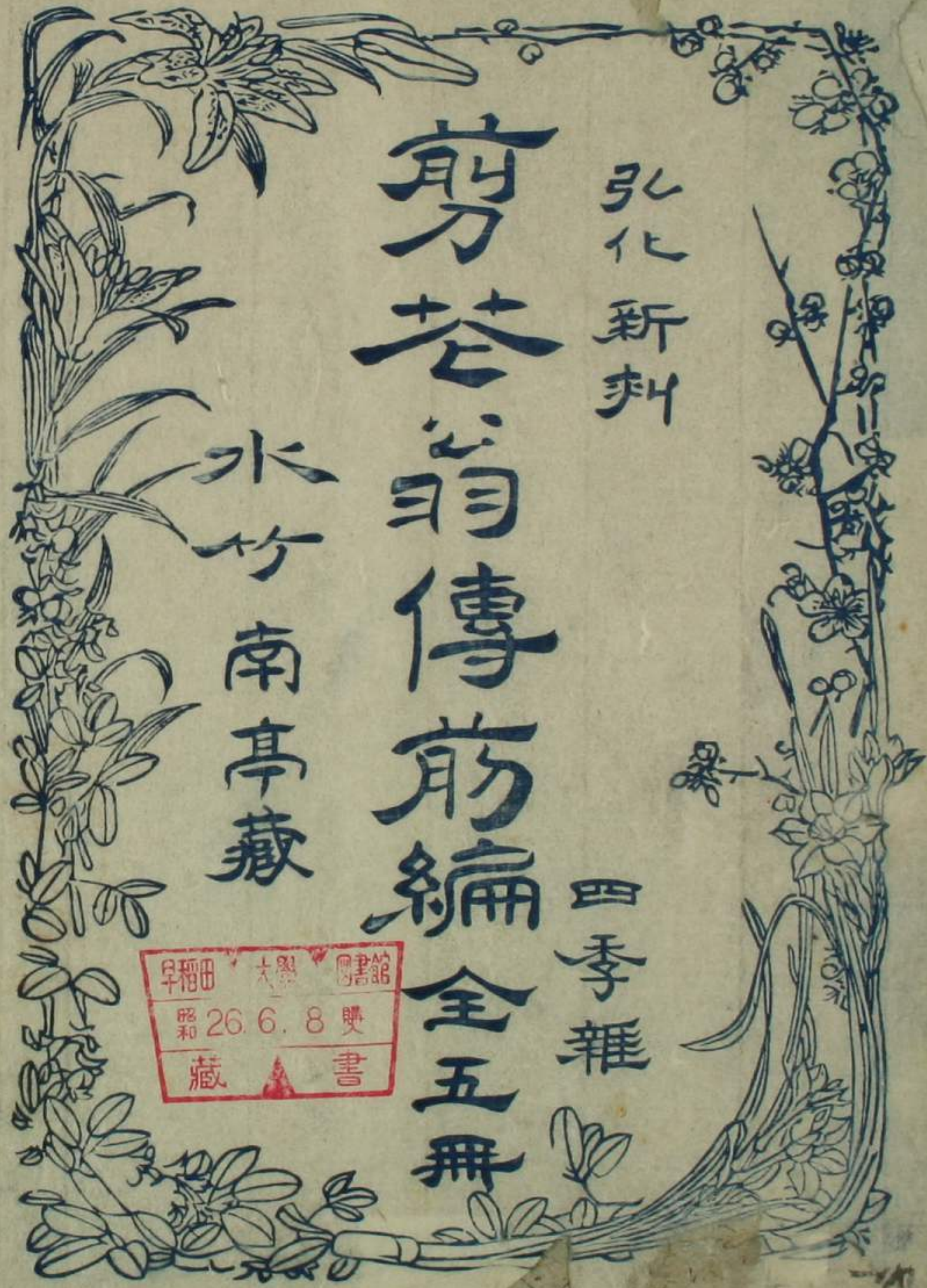
弘化新刊

# 剪花翁傳前編全五冊

四季雜

水竹南亭藏

早稻田大學圖書館  
冊 26.6.8 雙  
藏 書



## 剪花翁傳序

父母之於子、生育之道、無所不至、大地之於萬物、亦然、故曰、天地萬物、父母、凡欲育萬物者、非窮理於性、以順天地生育之道、不能也、友人水竹翁、性好培育中木、其術之精、大異於世之貧財傳秘者也、本之於五行、六氣、之運、配之於四時、十二月之候、窮理盡性、無餘溫矣、嗚乎、余者、醫也、以公翁之術、勻及起死之術、豈亦可不究其原因乎、則窮理於性、以順天地生育之道者、公翁與余、固所當講求也、翁自

山中文庫

白雲山

金石

剪花翁傳前編卷之一

序

著剪花翁傳、上梓以示同好之士、余深嘉翁之志、寃一言於卷首云

弘化丁未歲猛冬

圃齋古矢知白撰



剪花翁傳前篇卷之一

凡例

○浪花のりりみ倍言に剪出といへる者頗る六七十個あり  
 嘗て近郷近國二日路三日路又甚きを四五日と歷く草  
 木の花葉を剪得く賣花市小鬻き家業ゆせり  
 此後の中に代々傳へく業をせり老練のもの手馴覺は  
 剪花保育の温室冷害升水薬水等の專要なる精義と  
 今更小著して挿花者流の目近くあし易きとあしり  
 ○温暖の頃開花乃速ある代冷害して保る等素の業

剪花翁傳前篇

凡例

ぬり然るに冷寒は頃未開の花と急な温室を開くも  
 業も人作して天時を順ならぬ候なきもさるるに椿  
 梅の類は秋より萌して冷寒は至る迄漸く咲出さるる  
 寒風霜雪行きて窮し凋を暫く開く法はこれと  
 春に至る番開花なり是既に自ら萌し發する蕾あり  
 故に温室を助る時を忽ち開花するもの寒風霜雪の候輕淡  
 ある風土を秋より冬に續て漸く咲出さるる候はこれと  
 萌さ  
 づる花と温室にて開くはこれと故に是と辨れ出たり  
 ○存花の方々其精意を辨れりこれと樹艸の性質時候り

遅速剪花の刻節より變轉して手術の及ぶものあり  
 まは是れ小意の業あり然るも書しを豫に解く  
 其物成りて詳しうなればなり  
 ○存花の方々用ひざるも然るべき花のなり記しに及ぶものと  
 挿花者流の便覧と専らよむ故に屢其種を離れ出たり  
 ○草木育方の既し和漢の數書に著せり故に其書に譲て以て  
 是を省略と然るも亦草木各其性質に應じ方地  
 土肥下種分株移植接櫻等と擧て其用利を助る  
 蓋其或は精微に至るは盡くしお似たり譬へ土肥瘦

精粗の質なり 肥又厚濃淡薄の差なり 其能相應ざる所と  
分知せんて書中に盡しかり

○土の性質各國同等なる故に詳に擧げざれども 回莖或三舞止  
土のどろり草木養育の敷書よいまご擧む 夫回莖土のどろり  
浪花街巷の茂埃 惡水より引きく 大溝道へ入く未だ掘り  
落川より流き水底の土砂と雜りけり居る竟る腐泥  
とろり 浚川の度又搔上り 此泥土沙芥恰も河中より  
負り 氷飛りて 蓋色青黒く 中に雲母のどろり  
光澤を含有り 本質堅まり 砕け散ると 粘りあり 乾守

湿り 千樹万州 此土小植の時を成長繁茂せしむる

○上條の育方よ 方幾分陰陽地幾分乾湿と定め出でたるを  
八十八夜頃り氣候と元々いふれど四季各陰陽乾湿同  
からざるの如いゆへ 是と思量とべ

○畿内と隔離せる邊地の氣候は 宜其風土小應じて  
是と斟酌とべ

○樹州開花の季候り如し 歌書雜書の格例より 働ひ各其本  
節小出なき更なる浪花より 近世の氣候はやりのひち  
一旬或は二旬遅速なりて 本節氣候の次第と及し 頗る小同

大異をうらり 是其年乃寒暖よりぬり 扱四季咲といへり  
 春秋二季咲もの旬二旬の遅速ありて 竟ふ四季に速なるもの  
 所謂 冬牡丹 燕子花 月季花も種々ありあり  
 又梅類乃至くも中ハ七月梅 八朔梅 まも椿類の至て早ハ  
 白露 初嵐 秋ハ山ふど 八九月より月々お續き翌年三  
 月下旬に至く 梅椿の花もほつとつと 故小其部類で  
 分別され 本節お拘りて 種々艸木 各花其現蕩り節  
 月と考へ 元日立春の例は例ひく 正月より十二月迄は  
 次第して見易かしくし

- 毎條、既に開花の時節と攀ぐらと剪花者ともいひ
- 蕾落と剪得るは要をも 故其節頗る中未開り  
 時節と攀るなり
- 梅椿桃櫻牡丹芍薬瞿麥百合菊等各種類数多  
 しく悉く牧筆をへりて僅小其數種と出たり
- 栽樹家ハ大輪花と賞を 剪花者を格外の大輪花  
 好まざりし挿花を用たるは攀るなり
- 挿花者流各其家よりて禁忌花なり又或ハ當世  
 と憚りしは家よりされは是と斟酌せむ

○樹艸の名凡呼ふ剪花者と栽樹家と同じり同トから  
ぶるあり或ハ品數ハひくくして剪花者ハ呼べる名ハ少ク栽樹  
家ハ呼ぶ名ハ多ク蓋專ラ剪花ト要スル故ハ其等其  
論者ト其等トハ剪花者ハ通言トモトモトモ  
トモトモ鄙言モ亦少カクバ

○樹艸ハ名ノ如ク國言トモテ呼ラリ或ハ其字音ト直ハ呼ワ  
ル或ハ漢字ハ義訓トモテ呼ラリ或ハ雅名アリ或ハ俗稱方言  
アリ或ハ皆是通俗ト隨テ書セリ

○字音アリハ言葉等ノ假字遣ノミキト今是ト考訂セ

故ハ誤謬モ多クトモ

○樹艸生育存花升水の方ハ專ラ剪花翁ガ傳ト要トモ  
蓋近世諸家ニ秘スル所ハ升水の方屢多ク就中或家ハ  
秘スル升水の方ト撰ミ是ト章末小加ツル一方或ハ又方ハ  
二字ト以テ其方ノ難易ノ如キト各其深所ハハハハハ  
自ラ分知トモトモトモ

弘化四丁未春三月 木國中山雄平撰







○三ノ日 萼の花總と云。花形の總ての括ふと云。○又花萼と云。葩の萼と云て。齒ノ髭のつらと云。○又蒂と云。葩と莖と。隔つての莖。鋸ノ髭のつらと云。蓋ノ髭と云。又と柄との間。ツボミのつらと云。ツボミのつらと云。故ノツボミ。ツボミ。音義通り。萼髭髭三字の形音義。ツボミ。ひびきと云。ツボミ。

○四ノ日 樹の生木の樹体。○幹の身木。○枝の大小。○樹の同ト。

大枝より。小枝を生。此大枝即ち幹。○樹の樹の髭。

○梢の頂上の末髭。○標の斜枝の末髭。○圖の末卷小見と云。

剪花翁傳前篇總目次

搜索之例

イ	絲櫻	二月七ウ	池の島芍藥	三月三ウ	一八州	三月四
ニ	薔薇	四月三ウ	岩ぬら	六月五ウ	銀杏鶏頭花	七月ニウ
ハ	早白梅	正月一オ	貝母	正月二オ	早燕子花	正月ニウ
	早白桃	正月ニウ	春木瓜	二月六ウ	春透百合	二月七ウ
	葉がらん	二月八オ	春藤瞿麥	三月十ウ	玫瑰	四月三オ
	馬蘭	四月三ウ	さくし兔の花	四月四ウ	さくし花	四月五オ
	花菖蒲	四月九ウ	花柘榴	四月十ウ	防風	四月十オ

初瀬夏蘭 六月一ウ 早紫苑 六月三才 くらげウ 六月四才

早神遊夏蘭 六月六才 白山ウ 六月八才 びんウ 七月二才

葉鷄ウ 七月五才 播州猫柳 七月六才 萩 八月一ウ

八朔梅 八月二ウ 早水仙 八月二ウ 白露椿 八月四才

初ウ 八月四才 白青蘭 九月一才 濱ウ 九月四才

早ウ 十月四ウ 馬蘭 雜ニウ

二庭櫻 三月三ウ 二季咲躑躅 三月五才 日々ウ 五月三ウ

ホ ト庵椿 正月一ウ 牡丹 三月八ウ 鳳凰ウ 四月六ウ

郭公花 六月八ウ 鳳凰檜扇ウ 七月二ウ 鳳蘭 九月五才

本阿彌 正月一才

へ 紅の花 五月八ウ

ト 童子挑 正月七才

ららの尾ウ 四月一ウ

木賊 雜ニ才

子 兒梅 正月四ウ

千ウ 五月一才

矮鷄ウ 雜ニ才

リ 綠萼梅 正月一才

兩面中蘭 九月一ウ

辨慶ウ 五月一ウ

虎の尾 三月一才

烏頭 九月一才

土圭ウ 四月一才

月季花 三月一才

茶引ウ 六月一ウ

冬ウ 十一月一才

月ウ 三月一才

りんウ 三月一才

土圭ウ 四月一才

冬至梅 十一月一才

丁子ウ 三月一ウ

茶の花 八月一才

兩面椿 八月一才

りんウ 三月一才

りんウ 三月一才

りんウ 三月一才

ル 縷紅州 六月ウ

ヲ 小手卷州 三月ウ  
五月ア

をぎ 六月九オ

ワ 黄金梅 正月ウ  
嫩機樹 二月ア

和唐志ふに 七月ア  
和紫苑 七月ア

とびとけ椿 九月ウ  
黄梅 十月ウ

力 河骨 二月ウ  
から椿 二月ア

海棠 三月ア  
燕子花 三月ア

高麗菊 三月ウ  
風ふゆま 四月ア

唐子 五月ウ  
かん皮 五月ア

女郎花 六月ニウ  
七月五オ  
九月四オ

わうごん州 三月セウ  
八月六ウ

仙蓼 八月九オ

とれどと椿 三月ア

唐桃 三月ア

鎌山蔘 三月ア

樂州 四月五ウ

寒きく 五月ニウ

寒きく 五月ニウ

寒きく 五月ニウ

蒲穂 五月ア

川竹 八月ウ

寒きく 十月ウ

鎌倉 十月ウ

かん葵 十月ウ

唐覆盆子 二月ア

壇持 五月ア  
六月ウ

竹 五月ア

唐綿乃花 七月ア

うりお 六月セウ  
七月ア

寒ざら 九月ア

寒蘭 十月ウ

甲州梅 十月ア

唐まの 雜一オ

泰山寺櫻 三月ウ

唐萱州 四月ウ

唐桐 五月ア

唐紫苑 六月ア

なほみ 椿 八月ア

川萱 七月ア

加島白椿 十月ア

寒紅梅 十月ア

寒木瓜 十月ア

蘿萄花 三月セウ  
九月四オ

唐擬宝珠州 四月ア

蓖麻子 五月ア

なひら州 六月ア

唐索君 八月ア

唐葦 九月五ウ

田邊つひのつ 十月二ウ

圓栢 雜ニオ

竹並小筵 雜ニオ

連翹 二月ニウ

蓮 四月十オ

鷹爪 四月十オ

火蕉 雜ニウ

鐘艸 四月十オ

蔓つのつ 六月六ウ

菜乃花 正月五ウ

中鳩牛心李 二月七ウ

梨花 三月一ウ

瞿麥 三月七オ

並萱艸 四月十ウ

夏黃梅 五月五オ

南燭 五月七ウ

並白菊 九月一ウ

蘭 五月分

蠟梅 十月四オ

蘭香梅 十月二ウ

木槿 五月ニウ  
五月四ウ

六月二オ  
七月四ウ

ウ 梅つのつ 七月四ウ

茴香 八月九オ

鬱金蕉 八月九ウ

淡櫻つ 九月二オ

ノ 凌霄花 六月分

能勢蘭 六月九オ

オ 阿福桃 三月オ

大手毬花 四月十オ

大葵 五月一ウ

太田つ 五月ニウ

大山蓮 五月四オ

万年青 五月六オ  
五月五オ  
十月三オ

鬼百合 五月十オ

鬼つのつ 六月一ウ

ねもつのつ 六月三ウ

鬼菊つ 六月オ

蓬朽葉つ 九月二オ

ク 熊谷つ 二月四ウ

車返つ 三月一ウ

九輪艸 三月分

くち葉つ 六月六オ

孔雀檜扇艸 六月オ

高良薑 六月九ウ

東津つ 九月二オ

ヤ 八重紅梅 正月一才 八重雨下椿 正月四才 八重一重椿 正月四才

八重綠萼梅 二月一才 山料櫻 二月八才 八重白桃 二月九才 三月一才

揚貴妃櫻 二月九才 八重山吹 三月一才 山いらご 三月七才

八重桔梗 六月一才 山崎夏菊 六月一才 奴大菊 九月一才

やいで 九月四才 摩耶紅梅 二月一才 松本仙翁花 四月六才

マ 松毬椿 正月一才 丸いさく花 六月一才 旗 雜二才

木天蓼 四月七才 源平桃 二月五才 華慢州 四月九才

ク 玄庵椿 正月四才 扶竹桃 六月五才 ぬと蘭 三月四才

效子花 四月一才 豐後紋椿 正月一才

フ 藤 三月一才 ぬら戸 四月七才 ふうふう 五月八才

扶桑花 五月一才 冬牡丹 八月七才

コ 辛夷 正月七才 小うめ 二月九才 五月桃 三月一才

厚朴 三月六才 駒止 三月七才 小手鉢花 三月一才

紺菊 四月一才 小町州 五月九才 國部檜扇州 五月一才

金剛山 六月七才 紺紫菀 八月四才 小まら中菊 九月一才

小金のら菊 九月一才 腰蓑椿 十月一才 江州猫柳 十月一才

小藤椿 十月一才 五葉松 雜一才

工 金雀花 二月九才 江戸櫻 三月一才 化偷草 四月一才

猿猴州 四月一才 蝦夷檜扇州 五月一才 じんごう草 雜一才

テ 鐵線花 四月ウ

天神花 七月ウ

天神絞椿 十月ウ

ア 赤萩 正月ウ

紫羅欄花 三月ウ

鶯宿梅 二月ウ

牛心李 二月ウ

浅黄櫻 三月ウ

青木花 三月ウ

白菊 三月ウ

白すみ 四月ウ

漢蓀 四月ウ

青のり州 四月ニウ

紫陽花 四月五ウ

鸚鵡 四月十ウ

薺 五月ウ

白すみ州 五月ウ

秋藤瞿麥 七月ニウ

秋の山椿 八月ウ

葎 八月ウ

秋透百合 八月九ウ

秋菊 八月十ウ

秋擬宝珠州 八月十ウ

秋神遊菊 九月ウ

白せぼ 十月ウ

赤苺子椿 十月ウ

サ 笹葉椿 正月ウ

山菜萸 正月ウ

山丹花 三月ウ

櫻うの花 三月ウ

さくら草 四月ウ

杜鵑花 四月十ウ

澤桔梗 六月ウ

山茶花 八月ニウ

笹龍膽 九月ウ

さむぎ 九月ウ

三色椿 十月ウ

牽府椿 十月ウ

キ 菊花梅 二月ウ

さく桃 二月ウ

きり 二月九ウ

金仙花 三月ウ

霧島躑躅 三月ウ

金樺 四月ウ

五柳 四月ウ

きりげ 四月七ウ

京百合 五月ウ

きり州 五月ウ

擬寶珠州 五月ウ

金絲梅 五月ウ

桔梗 六月ウ

玉簪花 六月ウ

貴船菊 八月ウ

金紋菊 九月ウ

エ 雪柳 正月ウ

櫻梅 二月ウ

メ 芽柳 二月三才 妙蓮寺椿 九月一才

ミ 深山櫻 二月九才 水むせみ 四月十才 皆川白 五月二才 菖蒲 九月一才

水りゆい 五月十才 鼠尾艸 六月三才 引草 七月一才

水款冬 八月十才 峰り雪椿 九月四才 絲松 雜一ウ

シ 自在門梅 正月五才 四手辛夷 正月七才 垂絲萼梅 二月二才

白らみ椿 二月三才 紫丁香 二月七才 射干 二月七才

自然居士櫻 二月九才 蜆花 二月九才 鹽竈櫻 三月一才

桜攔の花 三月一才 四季咲菘若 三月十才 白うり花 四月一才

石南花 四月三才 白薔薇 四月三才 紫蘭艸 四月四才

芍薬花 四月四才 車輪梅 四月一才 沙羅椿 四月九才

志もけけ花 四月一才 縦斑蘭 五月九才 桜攔竹 五月十才

秋海棠 六月七才 七月梅 七月一才 白豌豆 十月三才

白苺子椿 十月一才 新家白椿 十月一才 白ふらふら 十月三才

垂松 雜一才 志らう松 雜一才

ヒ 彼岸櫻 二月七才 緋桃 二月九才 美人艸 四月九才

いー 四月一才 姫ゆき 五月二才 金絲挑 五月五才

晝白 五月一才 檜ゆき艸 五月一才 百日紅 七月四才

美人蕉 八月九才 日の丸 九月一才 飛龍 十月一才

一重山吹 十月一才 一重雨下椿 十二月一才 姫小玉 雜一ウ

モ 物ぐさ 正月三才 最上百合 五月一才 木芙蓉 七月一才

紅葉楓

九月

木蘭花

十月

石竹

四月

仙臺萩

四月

仙翁花

五月

豆以大輪椿

八月

又 蕨枋梅

正月

角の倉椿

二月

睡蓮

八月

水仙花

十月

剪花目次搜索畢

補添升水方並別傳合六十七員

自二丁至五丁

附方目次

温室冷害之辨

附一

古木切口墨打之方

附一

逆灌と厥之花之更

附二

季花並葉撮之訣

附三

椿並山茶花摺之方

附五

株接牡丹捷木之方

附六

寄接之傳

附七

移樹之辨

附十

挿花撓枝之方

附一

挿花剪口之辨

附二

萎凋花葉と蕪回と傳

附二

盆栽之辨

附三

同時節之辨

附六

接木砧之辨

附六

切接之傳

附八



補添附方合八十二條

總計四百五拾有八種

剪花翁傳前篇總目次尾

剪花翁傳前篇卷之一

正月開花之部

元旦立春之例

○早白梅

花一重 開花立春より自然に咲出之 方日向地

土赤土

肥 大便寒中入之 移冬月より正月より 接剪接

春彼岸

寒中に出る蒼の風霜ふいふもの温室に入るとも

あり此白梅より後小咲出梅をいふも大概自然咲く温室咲

を剪出さる 己下の諸梅育方並び同ト

○八重紅梅

花色共小花名の如く 開花立春後なり

○黄金梅 花一重色淡黄なり 開花正月初あり

○豊後紋椿 花八重 色無地紅なり又中紅地小濃紅紋あり

一枝毎小花咲交々 開花正月上旬冬を温室小入之 方日向西

北塞一所 地二三歩湿りよ 土回莖 肥大便寒中入

且樹の大小ニ應じ濃淡り斟酌之 移春彼岸まき

接奇接之 椿乃櫻方下の條小攀り 開き葉の中

り食塩と二撮入水二三滴おろし置其枝落どて罾

の保つ諸家うん是と秘傳とせり 已下諸椿肩方並同ト

○ト菴椿 花八重 色中紅紋之 形芥子椿少なり 開花正月

上旬より二月下旬までなり

○貝母 花七重 色緑と黄と白と相和りて赤黒れ

鹿の子の班入あり 開花正月上旬 方三步陰 花のふち日向し

まきや夏月早と厭り 地一歩湿 土莖土 肥淡小便水七歩

寒中まで澆ぐべし入寒より油掬て少し入 分株移

十月 水とくるときを切て焼く送水とく

○絲萼梅 花一重又八重重あり 畧して絲梅と云 信よ玉萼又玉

梅と訛り唱へり 花色潔白萼至く緑 故小名とれ 開花正月

中旬之 夢り亦同 青緑して清雅あり 祢美とく

○早燕子花

色青く尋常の花種之 開花正月上旬 方陽面

地坐地たるや信ふ掘技と称す此井水の晝夜湧流く水涯の南陽

受かる斤下り地小株と植く西北の風寒とよく開く此水の温暖

かりけ惹入るとなる春と申す花咲之此花初夏の頃も花咲あり

暖氣なかりて平常の花より却て逢く 肥 淡大便秋彼岸ふ

根降は溜り水と二日たより干上根本より高れ方より若し肥と入り三日

たより干切て後此水と惹入たり 分株 三月燕子花の條より

○早白桃

花二重又八重なり 開花正月中旬より漸く咲出

方地土移接等育方梅小同 蓋桃を花すふ淡小便

洗へー 已下諸桃育方並同

○松毬椿

花八重二重 色中紅 開花正月中旬より三月まで花なり

花の形中葩高く縁より出る葩段は低くより松毬の

○笹葉椿

花二重二種なり 色紅又紅白紋 葉形長く

葉ゆづり 開花正月中旬あり

○物狂椿

花二重 色白輪 紅輪 紅白點斑輪 紅白筋斑輪 紅白紋輪

是の如く毎輪交雜して咲くと物狂の名なり 開花正月中旬

此花と中品と又九月下旬ふ咲る物狂より最美麗き花

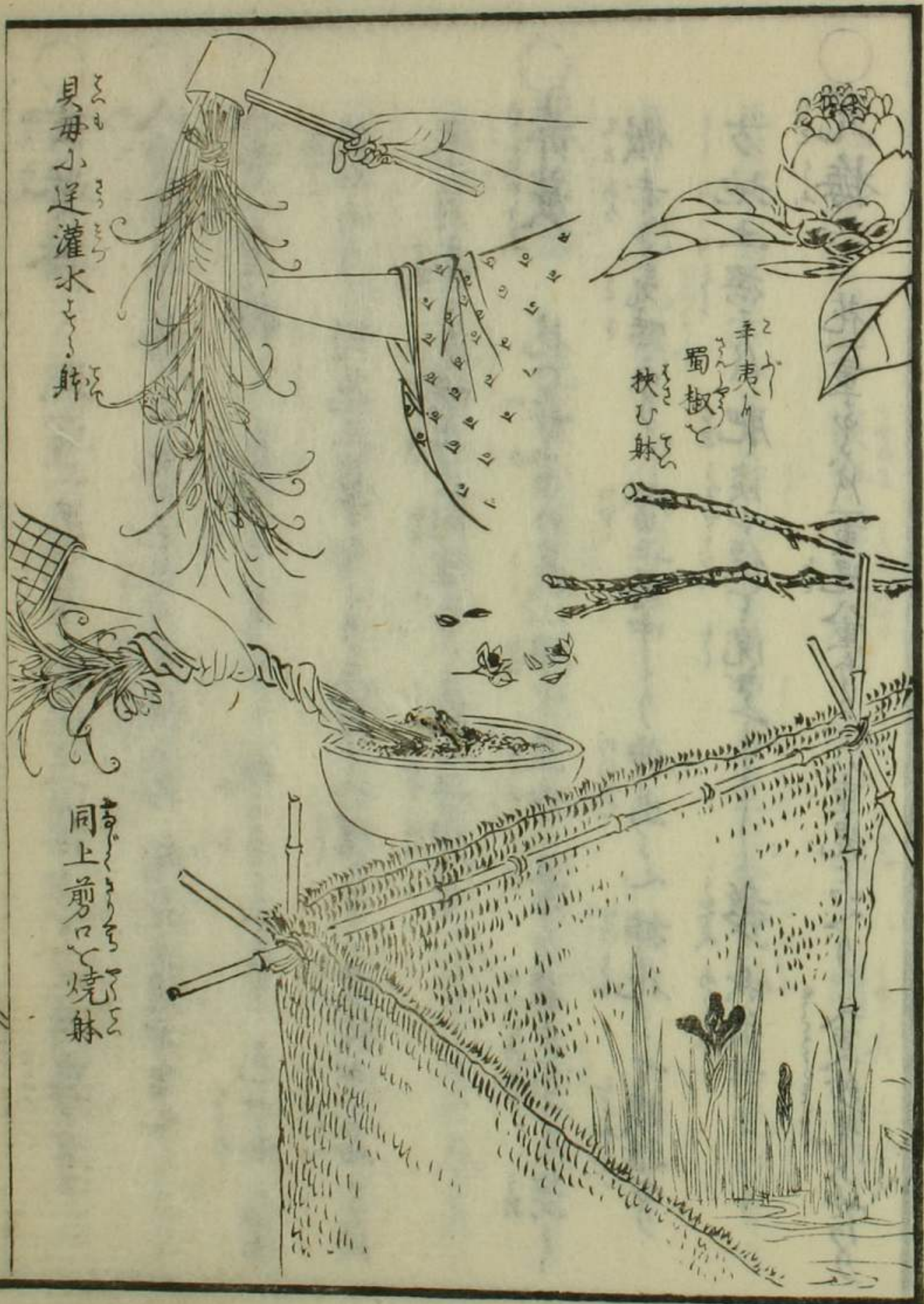
是をいづく上品とあり



一重録芋拔

松球椿

地軸水  
と老て  
燕子花と  
早春  
開る



貝母小足灌水

手表  
蜀椒  
扶心鉢

同上剪口焼鉢

○玄菴椿 花八重 色淡赤 開花正月月中旬より二月盛あり

○八重雨下椿 花の色紅白絞 英大輪 開花正月月中旬之

○八重一重椿 數花あり 花の一種名とあり 色中赤 又中赤

絞斑あり 開花正月月中旬より三月まで咲あり 是は中品と云

又十月末より咲出る同種あり 是は上品と云

○赤菘 花の尋常の菘と同じ 莖赤く葉を緑色少く淡く

微赤き気味あり 蕾正月中より伸出る挿花して頗雅あり

方地土櫻と云 肥淡少便と焼きてよ 移 秋彼岸より

○兒梅 花二重あるは重見八重ありと重見とあり 又更紗兒とあり

花二重ありは色も淡紅も濃紅あり 形も同く開花も同時と云

正月下旬より二月まで咲くことと更紗兒は菘蕾尖りて花咲り

色も淡くあり

○蘇枋梅 花二重 色濃紅 開花正月下旬木肌より心に至るまで

最赤より蘇枋の名あり此花より以後の梅は温室に入れ及ん

○自在門梅 花八重 色淡赤 開花正月下旬より咲く實の味は

勝る挿花不用ひく賞あり

○山菜萸 花色黄之小細なる英群簇と批把の實一箇よりありの光き

房とあり 開花正月下旬より彼岸盛之 方日向 地土櫻と云

肥大便寒中入こん分株ぶんしゆ櫻さくら春彼岸はるのうらまま此穗このこ新しん菱あし大おほ

指許ゆびさのものもの小枝こゑだとと番ばん切拂きりばやや村むらへへ叔寒おとせむ中ちゆう花はないいままとと頭あたま

ざざ時とき其その閑雅かんやかかとと茶席ちやせきの賞しょうととんん是これよりより時節ときせつ少すく後あひ下くだ温ぬる

室むろ入い花はな半はん開ひらてて挿花さしはなふふ充みつつてて木きふふ雌雄めおとああまま唯樹ただきの花はな最も勝かちとと

ありあり予よ一ひと日ひ取樹とりのきのの扱あふふ此この枝えだ二ふた本ほんとと不ふ開ひら逆さか立たてて二ふた本ほんもも自おの

らら根ねとと生なじじ芽め茂さまりまりかかままばば此この他たのの樹きもも逆さか立たてて芽め根ね

ともとも生なじじるる芽めももありありぬぬばば竹たけのの株かぶ際ぎは小こ芽めはは備びわわるるをを并ならべべしし

根ね生なじじてて枝えだ繁さかまりまりかかままばば逆さか様さま竹たけはは奇き説せつもも美みぞぞ怪あやししむむららんん

○菜の花 種類多しゆるい花の色はないろ金きんもも黄き之の聊いさちちもも大おほ小こりり俗ぞくよよかかつつ

菜なりり油あぶら菜な高たか菜ななな若菜わかしな雉子菜けいしな等らありあり開花ひら正月しんげつ末すえ

よりより諸菜しよな花はな漸しんとと尋たづねねてて咲さひひ七しち月げつ下くだ旬じゆんよりより八はち九く月げつ逆さか漸しんとと種たねととまま

就中しゆちゆうててかかきき菜なとと起葉おきばとと卧葉うてばとと二種ふたしゆありあり起葉おきばをを花はな莖せき高たかくく

伸のびりり此花このはなをを四よ季きとと拘くわりりばばてて咲さひひののたたりり時ときもも四よ季きまま

かかききばば方ほう向きゆう地土ちつちままりりとと肥こぼ淡たん大便たいふん初はつ入いりり下種くだねとと

なな芽生めしやじじてて後のち淡たん小便せうべんとと度たびとと焼やいいふふ又また冬ふゆとと茶ちやととくくもも

けりけりてて花はなとと剪置きりおききとと萎凋わいしやう之の上うへにに切きりり小直こちやくららにに未熟みじやくとと

付つきき保たもつつててままももああままはは是これのの少すくの花はなをを手業てわざもも足たりりりとと未み

ああままはは剪花きんはな者もののの後のち初はつもも二把ふた三把さんの花はなとと切得きりえららににとと未み

薬のたぐひをさねを切置<sup>きりおけ</sup>て花莖<sup>はなざき</sup>を<sup>あ</sup>凋<sup>おと</sup>すても心<sup>こころ</sup>をせむ  
把<sup>つか</sup>て逆<sup>さか</sup>るな小<sup>こ</sup>ち<sup>ち</sup>冷水<sup>れいすい</sup>と灌<sup>かん</sup>ぎ少<sup>ち</sup>間<sup>かん</sup>して水<sup>みづ</sup>器<sup>が</sup>又<sup>また</sup>生<sup>なま</sup>置<sup>お</sup>き用<sup>もち</sup>ふ  
ぎ<sup>ぎ</sup>な<sup>な</sup>を<sup>を</sup>凋<sup>おと</sup>すも逆<sup>さか</sup>水<sup>みづ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>當<sup>あた</sup>日<sup>ひ</sup>も用<sup>もち</sup>ひら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>もの  
此<sup>こ</sup>種<sup>しゆ</sup>類<sup>るい</sup>の<sup>の</sup>育<sup>そだ</sup>方<sup>かた</sup>同<sup>どう</sup>ト

○雪柳 花の色白小英葉の間毎小出<sup>こま</sup>て 開花正月末 方半蔭

地二分湿 土糞<sup>どふん</sup>と<sup>と</sup>肥<sup>こ</sup>小便<sup>せうべん</sup>節<sup>せつ</sup>又<sup>また</sup>花前<sup>はなまへ</sup>二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>澆<sup>や</sup>ぐべ<sup>べ</sup> 分株

移<sup>うつ</sup>とも小秋彼岸<sup>せうあきひがん</sup>

○紫羅欄花 花の色赤紫古株<sup>あかむらさきふるき</sup>乃<sup>すなは</sup>五年<sup>ごねん</sup>に及<sup>およ</sup>ぶもの 開花正月

未<sup>な</sup>又<sup>また</sup>咲<sup>さ</sup>れり 方日向<sup>まうひさか</sup>地<sup>ち</sup>二分湿<sup>ふぶんじつ</sup>土<sup>つち</sup>回<sup>まわ</sup>壘<sup>う</sup>肥<sup>こ</sup>淡<sup>たん</sup>小便<sup>せうべん</sup>春<sup>はる</sup>早<sup>はや</sup>く<sup>く</sup>

○兩三度澆<sup>りうさんどやう</sup>ぐべ<sup>べ</sup> 水<sup>みづ</sup>升<sup>あが</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>れた時<sup>とき</sup>を<sup>を</sup>剪<sup>き</sup>り口<sup>くち</sup>を<sup>を</sup>酢<sup>す</sup>煮<sup>に</sup>と<sup>と</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>

○辛夷 花八重<sup>はちぢゆう</sup>もつ之<sup>これ</sup>きま<sup>ま</sup>れ 色淡紅<sup>たんこう</sup> 開花<sup>かいが</sup>早<sup>はや</sup>き<sup>き</sup>正月末<sup>しょうがつまへ</sup>より

三月<sup>さんげつ</sup>まで咲<sup>さ</sup>へ 方日向<sup>まうひさか</sup>地<sup>ち</sup>二分湿<sup>ふぶんじつ</sup>土<sup>つち</sup>糞<sup>ふん</sup>と<sup>と</sup>肥<sup>こ</sup>大便<sup>だいべん</sup>寒<sup>かん</sup>中<sup>ちゆう</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>

接木<sup>つぎき</sup>蓮<sup>れん</sup>華<sup>げ</sup>砧<sup>しん</sup>小<sup>こ</sup>春<sup>はる</sup>彼岸<sup>ひがん</sup>奇<sup>き</sup>接<sup>つぎ</sup>小<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>移<sup>うつ</sup>秋<sup>あき</sup>彼岸<sup>ひがん</sup>よ<sup>よ</sup>

水<sup>みづ</sup>の自然<sup>しぜん</sup>よ<sup>よ</sup>升<sup>あが</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>上<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>割<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>切<sup>き</sup>り<sup>り</sup>割<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>蜀<sup>しやく</sup>椒<sup>か</sup>を

三四箇<sup>さんしうご</sup>木<sup>き</sup>大<sup>だい</sup>小<sup>せう</sup>鷹<sup>たう</sup>ト<sup>と</sup>扱<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>水<sup>みづ</sup>器<sup>が</sup>小<sup>こ</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>水<sup>みづ</sup>と<sup>と</sup>後<sup>のち</sup>挿<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>度<sup>ど</sup>

○四手辛夷 花の色淡紅<sup>たんこう</sup>形<sup>かたち</sup>四手<sup>しすて</sup>の<sup>の</sup>下<sup>しも</sup>小<sup>せう</sup>垂<sup>た</sup>り<sup>り</sup> 開花

正月末<sup>しょうがつまへ</sup>より 方<sup>ま</sup>向<sup>むか</sup>水<sup>みづ</sup>升<sup>あが</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>共<sup>ども</sup>小<sup>せう</sup>羊<sup>やう</sup>夷<sup>い</sup>小<sup>せう</sup>並<sup>な</sup>び<sup>び</sup>同<sup>どう</sup>ト

○童子桃 花<sup>はな</sup>二<sup>に</sup>重<sup>じゆう</sup>又<sup>また</sup>八<sup>はち</sup>重<sup>じゆう</sup>あり 色濃紅<sup>なるこう</sup> 蕾<sup>つぼみ</sup>正月<sup>しょうげつ</sup>上<sup>かみ</sup>旬<sup>じゆん</sup>より 湿<sup>しつ</sup>室<sup>しつ</sup>よ

入る自然咲の正月末より二月上旬は咲重の二月上旬より同中旬は咲之白地  
 温室小入ると正月廿日頃なり總て地類の温室を花出する時葉もすこ  
 芽と出だんより花出ぬるまでや日とあく温室小あけを赤き花  
 いろあかた  
 色大小よく変つて甚見苦く又白地を素より白きゆふ  
 変ぢれも葉は芽黄白く多て見苦く是其蒼蕾の節り  
 芽と出だんより花出ぬるまでや日とあく温室小あけを赤き花  
 いろあかた  
 色大小よく変つて甚見苦く又白地を素より白きゆふ  
 変ぢれも葉は芽黄白く多て見苦く是其蒼蕾の節り

二月開花之部

○菊花梅

花千重形之く小菊小似たり 開花二月初より

○角の倉椿

花千重葉なり 色濃紅小白斑紋あり 開花二月上

旬より三月下旬まで花あり正月申より温室に入ぐ下旬は花出  
 形大きく外葩大く心小至り漸く之く開れ残るもの玉とあ  
 つて花は心とわくは是角の倉なり本形はて最賞なき花之

○八重絲萼梅

花の色白く 開花二月上旬 此花殊小勝もく

○岳絲萼梅

花重 色白く 開花同上枝より七雅曲なり賞は

○摩耶紅梅

花八重 色濃紅 開花二月上旬 初午盛なり

蕨條青絲く最美しいもの

○豊後梅

花重あり八重なり 色淡赤なり中吉なり 開花二



月上旬挿花して愛之實の殊小美秘に予の園中  
植育つもの花重く色中紅より子の大小一升小十六をりは  
肉味を晚桃の如く氣味厚く皮薄く核せき干梅り  
かして爛きだ形容全

○鶯宿梅 花重色太白形大輪 開花二月上旬 賞翫とべ

實を苞丁に所謂煮梅と称する中を最上最なり

○連翹 花黄色 開花二月上旬 温室咲を正月上旬 方日向

地三分湿 土揚むと 肥沃大便寒まよふ 移櫻も春彼

岸 三枝の雄木の垂枝の雌木あり雄木の方より

○芽柳 加賀柿の大まがり之餘柿を芽餘色して中まがり

白芽柳 黒芽柳も中まがり都て垂柿の春嫩葉延出

て剪花者の青柳とて二月の頃水升ぐく嫩葉萎凋ひの

是は逆水して横山か葉葉の類を色も置べし少間

活より或は鋸目や入く水小杆置もよ 櫻は早春

○白角倉椿 花千重色白 開花二月上旬より四月まで有り

其大きく又外葩も大して心小至り漸くせき開きのとき

の玉より花心と頭を元より葉を剪花者略

てまるとよ呼り上品

○河骨 萍蓬州 花黄色なり紅あり濃紅あり又黄花小龍甲の

斑入葉あり又至く此きものあり是と姫河骨より 荅蕾二月上旬よ

り切之 分抹 移春彼岸之 水田植 其の冬を多く生じれば丈

短し 水深た所植 其を数少ふれば 莖太く花葉共長く

大くして黄花の常れど 赤花の蕾青黄して 漸く淡わく

開て後赤くわく濃紅を蕾より赤くして開けの蓋赤く極上

紅小かり是と上品とんて剪得ても水の至く上かると是を

冷井水と切口より水彈とて彈きけしむ 水の升るから

莖葉の表面より 挿花器小生る此水彈と

竹筒或は銅筒ふらして彈くもりまじりまじり至るは又莖葉も動

揺して萎いむむらりこれを世倍よ用ふる所の木作の史を

水彈甚よたとの俗小コビスイと疑らるる小備水の字から

是のくもれは薬水と用ふるにやうなれど亦時小應く

施さざる為り左小是と擧るなり

○水飛の唐滑石水と和し向く程よく搥ると 焼明荅分り水合

○川芋ニ及ぶ水合の煎湯 右三種の内分るても一方よりて彈き詰もは

○牛心李 即地 花重あり一重なり 色濃紅 開花 春彼岸中

方日向 地土掘るに 肥大便寒中へ 移十月より正月迄は

温室を二重花の二三日して出づる八重を四五日して出づるありきれを  
蕾りも中うまゝの花の多少も其時の趣よして一夜入るも亦  
三四夜入るも其短長を定めしむる水はよく升もあがり

○熊谷椿 花二重色濃紅 葉太く大きき 開花二月中旬

○唐椿 二種 花八重色紅又紅白絞あり 開花二月中旬より三月

下旬まで花あり 寒冷の風土よりして尚四月中旬後にも剪出せり

○嫩機樹 數種 即若芽紅葉二月中旬 方日向地二分湿

土回莖 肥大寒中に入し 移秋彼岸後より土月頃まで

○毛氈 ○縮緬 ○定家 ○山 ○青海 ○綠青海 皆若芽出

至る赤く葉満開て後青く秋淡く照之毛氈殊ふり

青海の葉七辨して色亦深して長くうらみらん。野村色紫

して秋も同じ色あり紙に摺寫せし紫のり。一行寺芽出

の時を少く赤く開花満て青く秋を枝群照之都て芽

出の枝を水上うすし是を枝本と水小入るとわの行程の長と

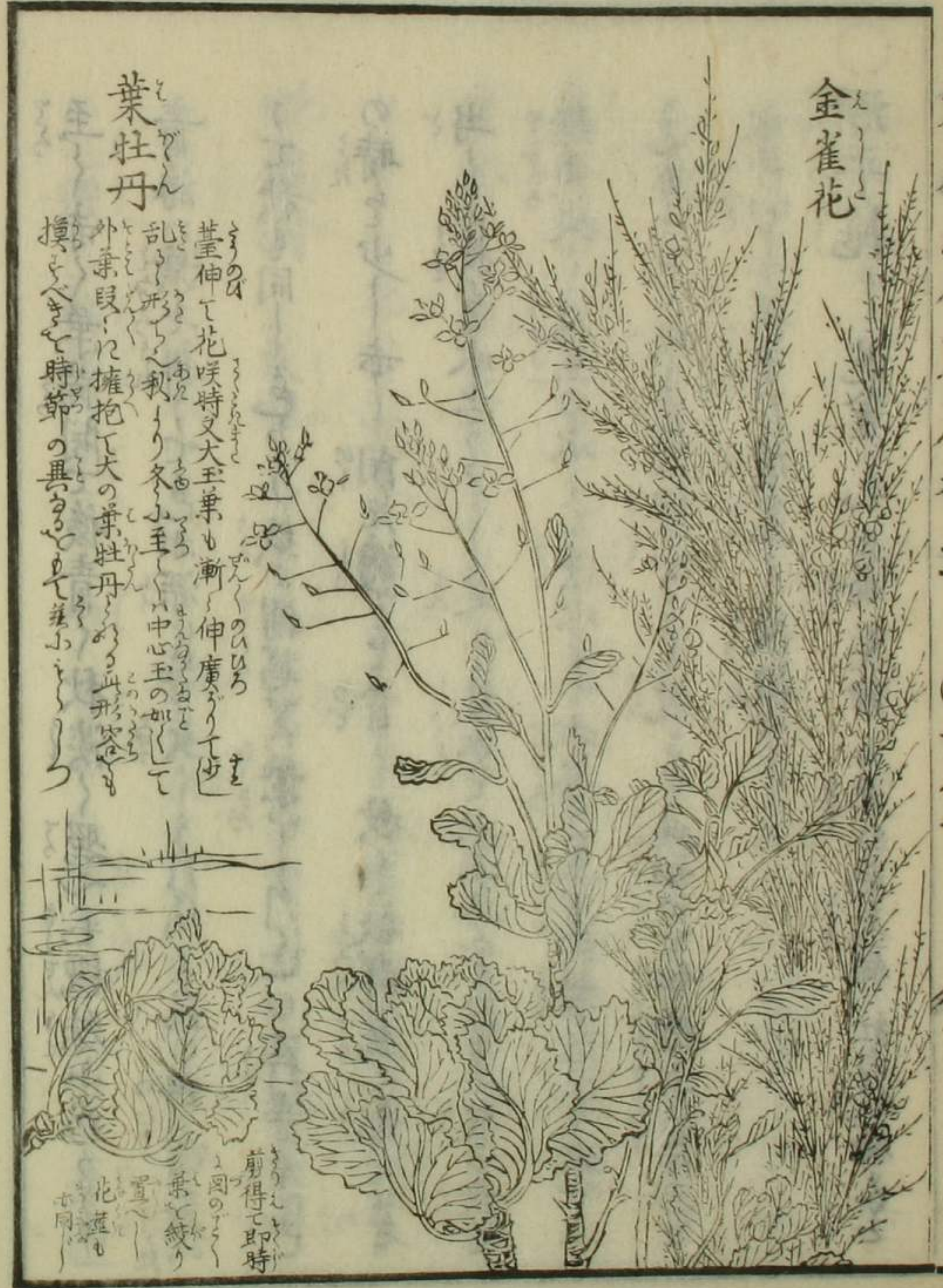
鋸目と入る汲立の水と逆水とて水黒く生置ハ勢ひく水と上

るのり日と短くもの切口とて焼く此切口と切捨木通の末と

水小和し其中に漬置くと後挿べし

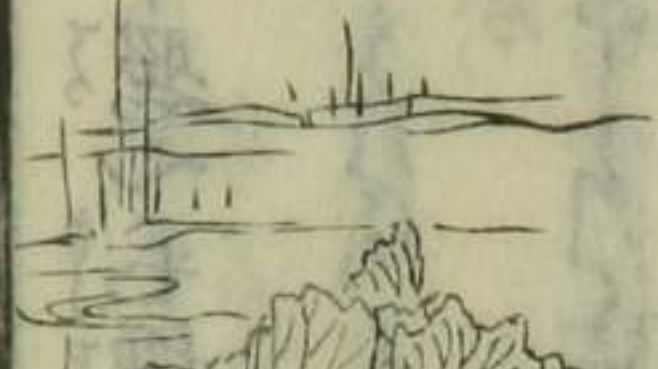
○源平拖 花重色白輪紅輪 白葩紅葩交輪 紅白絞輪あり

金雀花



葉牡丹

茎伸て花咲時又大玉葉も漸く伸廣うりて少  
乱く形も秋より冬小玉の中心玉の如くして  
外葉段々に擁抱て大の葉牡丹の如く形も  
摸入きて時節の異なりて葉小くしりし



剪得て即時  
葉を絞  
置て  
花を  
同

嫩柳



洋蓬の廣葉の  
虎尾水  
升水の鉢

一枝の内小種々咲雜之 桃花二月中旬 此花至て麗しくて此  
 樹と初て産し設る方あり 夫八重白桃八重緋桃もどに實の登る  
 こと甚希かり然るに偶登るは採て蒔小木もりて赤木  
 白木と接又白木赤木と接此赤白の接穂小登る枝とまて  
 蒔て生ざる木小咲花ハ即源平とあてて是中うばも遠く  
 ざるの理あり一重花の白桃淡赤の種々小交りて咲出るとの  
 既より是も常々桃砵小重の白桃淡接し穂小登る枝乃  
 自然生るものあり是砵桃の淡赤色の萌せり

春木瓜

花の色濃紅あり白あり けれど白と之を淡赤と含めり

潔白なるもの 桃花二月中旬 方地土肥樗を分株し出芽て

紫丁香

英丁子の如きもの 檜葉にて房てあり 桃花二月中旬

香氣強し葉小白に覆輪斑かともあり 方三分陰 地二分湿 土樗を

肥 淡大便寒中へ 花前小淡小便を 移樗もに春彼岸よ

射干

胡蝶花 花の色白小紫點あり 桃花二月中旬より四月最中より

方半陰 地土肥樗を分株 移春彼岸

彼岸櫻

花一重又八重形之 桃花名の如く春彼岸の頃 方日向

地二分湿 土砵を肥 大便寒中へ 移秋彼岸 株山

料櫻の種々春彼岸 蒔砵 諸櫻を寄世接小もりて芳塾山

皆是山料櫻の自然生なり後世此種と山料櫻と号しをりて古々  
山櫻とのと呼ばるる一己下の諸櫻育方並ひ同ド

○絲櫻 花重 開花彼岸の頃之枝は厚くも長く垂る

○春透百合 花淡赤色 開花二月下旬より三月中旬迄あり 方日向

地二分湿 土回壘 肥 秋末まで一淡小便彼岸より春花前迄月々

三度宛澆じ 移 秋彼岸より一己下の諸百合育方並ひ同ド

○中島半心李 花重なり重なり 色濃紅とて牛心李に異なり

開花二月下旬 方日向 地土肥 移 十一月より正月迄

此枝水の上りぬもの一夜を越えきりなり是の切口を復切之此切

中より其きりなき所と捨隔り折るとして切ぐかきその切口爛る故小水より  
升りて翌日夕方まで保つて一其後を保つ

○葉牡丹 花葉の花の如く色黄之 開花二月下旬 方地土肥

肥 淡小便冬より春小至る三十日許小三度澆ぐべし其後小油粕成

置け芽より上りあり 櫻春花の前より根を吹く芽を缺て即時小杆へ

春は土用より立秋の頃小根より下まきして三歩の小便を度々

澆げ秋は未より冬にかけて大の葉牡丹を多かり 秋より冬小かけ

杆を活きねども春まで垂て悉く花不成葉牡丹を多かりは春又四季

にも芽を撰び杆は皆大葉牡丹なり此芽のえり中より言華めて解



冬より彼岸櫻いとさう深山櫻ハ剪伐しても新條よく出たもの

○楊貴妃櫻 花重重開花二月末形似花麗

○蜆花 花蜆の肉乃ごとく 色白 開花二月末より三月よりふされど

挿巻巾を用ひて秋紅葉をりしう閑雅あり

○桐の花 花の形ち胡麻の花に似れ最大 色濃紫 開花二月

末より五月上旬まであり九月上旬より蒼朮より 升水の方ハ嫩撥樹と同じ

○金雀花 又雀見花 色極黄形ち蔓豆の花に似たり 浪花桃山小

てり 開花二月末より咲北の五箇山より三月末より四月よりけて咲あり

○方背向 地干 土砂雜肥 油粕 播 春秋の両彼岸よりたうより三月の

時より三四尺より五六尺ふかき 移 三月もさても活生易うほど日陰湿地お

かた植まは枯え挿花ハ四季ともを用ひて賞あり 〇五ヶ山と山々のふ

あゝと畷野村とてり 蓋畷野村ハ横州川辺郡山下谷とてり 廣原小のて

同郡多田郷より半里許あり北山と詔とハ則ち山下谷之此村の奴碑なるもの各

日山小ハ刈取所の薪柴五擔よりく入終日のけりには元るあり

故に土俗此村と異名して五ヶ山とてりありと也

○唐覆蓋子 花重 色白 開花二月末より三月まであり 方三分陸

地三分湿 土換ごと 肥大便寒中入る 下種 春彼岸 分株 春彼岸

より芽出く 筍のどく 是と缺分植ごと 移 十月之 葉ハ葡萄のど



此月より紅葉して散きことの風春を挿花小めちし正月月中旬より  
彼岸よりひて若芽生むるを用ひあり

剪花翁傳前篇卷之壹畢

Handwritten notes at the bottom of the left page, including the characters "廿四日" (February 24th).

